

受験番号	
氏名	

一 次の文章を読み、後の問に答えよ。

函館市内から北へ、車で一時間ほど走ったろうか。トンネルに入った。長いトンネルである。トンネルから出ると、あたりの景色は一変していた。眼前に、高山がそびえ立っている。

「どうです。堂々たるものでしょう。駒ヶ岳ですよ。一一三メートルあります」  
案内人は胸をはって言う。

眼下には、湖が広がっていた。

「あちらが大沼、こちらが小沼。日本の湖水地方よろこぞ！」

湖水地方と言えば、イギリスが本家であろう。ピーター・ラビット物語の作者ポター女史を取材するために、私は何度か彼の地を訪れたことがあったので、まんざら知らぬ土地ではない。その本家と比べてみても、<sup>a</sup>遜色のない、雄大な風景ではないか。

駒ヶ岳と大沼の間には、深い森が広がっていた。車は、森の中の小道をなおも走り、ようやく止まった。木の間がくれに、一軒の小さな山小屋が見えている。いまにもくずれてきそうな、おんぼろ山小屋である。案内人は、それを指さしながら、

「あれです。あの山小屋です。今、売りに出されています。お買得です。こんな物件は、めったに出るものではありません。新井さんご夫妻は、なんとラッキーなんでしょう」

山小屋の内部とそのまわりを見てまわった。秋の陽がかたむいて、少し肌寒くなってきた。妻を **A** 車に戻ろうとすると、意外にも彼女の視線が熱いのである。

「すてきねえ……」と妻。

「おじいさんの山小屋みたい。わたし、山羊と <sup>b</sup>イッシュに住もうかしら……」

少女時代から今日に至るまで、妻の愛読書といえ『アルプスの少女ハイジ』なのである。どうやら彼女は一目見ただけで、大沼の森にかたむいて立つおんぼろ山小屋が、すっかり気に入ってしまったらしいのだ。

たぶん、浅からぬ **B** があったのだろう。さまざまないきさつの後、私たち夫婦は結局、その山小屋を買い求めることにした。今から二十六年前はど昔のことである。

はじめの頃は、夏の数週間だけ滞在した。やがて、春と秋にも来るようになった。問題は、冬である。冬には、二メートルの雪が降る。気温はマイナス十五度まで下がる。はんばな寒さではない。うっかりすれば凍死してしまうだろう。 **C** 冬だけは敬遠していたのだが、冬の大沼こそ最高に美しいことがわかって以来、冬季も滞在することにした。思い切って、移住したのだ。

**D** 妻は、山小屋の隣りに動物小屋を建てまして、豚や山羊を飼うようになった。 **E** 最近では、羊におちついたらしい。もっかのところ動物小屋には、八頭の羊が飼われている。したがって誰かに妻を紹介する際は次のように言わねばならない。

「妻です。『羊飼い』をしています」

妻は羊飼いだ、 **F** 羊飼いの亭主である私は何をしているかというと、小説やエッセイを書いて暮らしている。時々、作詞したり作曲したりすることもある。その中の一曲に『千の風になって』という歌がある。その話を次に書こうと思う。

私のふるさととは、新潟市である。彼の地に住むおさなじみの一人に、川上耕君がいる。夫人の名は桂子さん。二人の間には、三人のお子さん。その桂子さんが、ガンで <sup>c</sup>急逝してしまった。まだ四十代の若さだというのに。あとに残された家族たちの悲しみは、 <sup>d</sup>ジンジョウではない。私は考えた。〈彼らの悲しみを、少しでも和らげてあげる手だてはないものか……〉

一年後、新潟から追悼文集が送られてきた。その中に作詞者 <sup>e</sup>フショウの、不思議なポエムが紹介されていた。死者が生者をはげましているのだ。一読して私は感動した。ルーツを辿ると原詩は英語だった。〈よし、この英語詩を日本語に翻訳して、メロディーを付けてみよう。そうして桂子さんを偲び、耕君たちをなぐさめる歌を作ろう……〉そう考えたのだ。

二〇〇〇年の夏、大沼湖畔の山小屋。私は、ひどく苦しんでいた。作者不詳の英語詩の翻訳が、どうしてもうまくいかないのだ。私は気分を変えることにした。月子—というのはミニチュアダックスの愛犬のことだが、彼女をさそって散歩に出ることにした。山小屋をぬけだし、森の中の小道を歩いた。歩きながら私は、ありったけの大声を張り上げて、十二行の英語詩を朗読してみた。

Do not stand at my grave and weep.

I am not there, I do not sleep.

森の中を木霊する私の声を、月子は不思議そうな表情で **G** をたてている。やがて朗読が終わった。月子が急に立ち止まり、何かにおびえたような顔つきで「ウーツ」と低いうなり声をあげ始めた。そうして森の奥の暗闇に向かって一声「ワン！」と吠えた。その瞬間である。

森の奥の暗闇（駒ヶ岳の方角）から突風が吹きつけてきた。木の葉をまきちらし、樹木を押し分け、不気味な轟音をたてながら、ものすごい力で吹き寄せてくる。

「月子、あぶないー!」

私は、足下でふるえている月子を抱き上げた。小さな月子の身体が、大風に吹き飛ばされるかと思ったからだ。

その <sup>f</sup> シュンカン、ひらめくものがあった。

〈そうか！ 要するにこの英語詩は、風を主人公にして翻訳すればよいのだな……〉

私と月子は山小屋に戻った。すぐさま私は英語の日本語訳にとりかかった。十二行の英語詩を、どのように翻訳するべきか。風をつよく意識しながら翻

訳したら、当然のことながら「**H**」ができあがっていた。

十二行の英語詩には、winds (風) ということばは一回しか登場しない。ところが、私が翻訳した日本語詩に winds (風) は、六回も登場することになる。難産だった日本語詩が、ようやく完成した。今度はメロディーである。さあ、どんな旋律にしよう……。

私はギターをとって、イスに座った。

月子がすっとんできて、私の足元に「正座」した。月子は、歌を聴くのが好きなのである。私がギターの調弦を始めると、さかんに尻尾を振って「早く歌え、早く歌え！」とサイソクする。やがて調弦が終わった。

「お待ちせしました、新曲です。曲名は、『千の風になって』といいます」

私は、月子に向かって一礼した。

ある日、アイヌ民族の人々から、次のような手紙が届いた。

「『千の風になって』を、アイヌ語に翻訳して歌ってもよいでしょうか……」

手紙によると、「千の風」の世界観とアイヌ民族の人々の世界観とは、共通するものが多いのだそうだ。あの歌の **h** コンカンをなす宗教観や死生観にも、共感してくれたい。

ありがたい手紙だった。歌とは、歌われなければ死んでしまうものなのだ。共感され歌われてはじめて歌は、生き生きと生き始める。ましてやアイヌ民族の人々がアイヌ語で歌ってくれるとは、名誉なことではないか。私が大いに喜び、**i** カイダクしたのはいうまでもない。

アイヌ語による『千の風になって』のおかげで、たくさんのアイヌ民族の人々と親しくなることができた。その中の一人に、秋辺デボさん(五六歳)がいる。デボさんは阿寒湖畔にたつアイヌシアターで活躍する俳優兼舞踏家のだが、同時に演出家でもある **j** イツザイなのである。

デボさんには、二〇一三年三月、日本ペンクラブが主催する平和の日・函館のつどいにも出演してもらった。民族衣装に身を包み、アイヌ古式舞踏を踊ったあと、アイヌ語の千の風を歌ってくれた。すばらしいステージだった。公演終了後、**l** 機会を得た。

「マンさん、アイヌ民族には、面白いことばがたくさんあってね……」とデボさん。

「たとえば？」と私。

「たとえば、イランカラプテ」

イランカラプテとは、アイヌ語で「こんにちは、よく来たね」を意味するのだという。

「と同時に、その奥にもう一つの意味がかくれている……。あなたの心の片隅にそっとふれさせてください……」

つまり、世界一ひかえめな言葉なのだという。デボさんの話を聞いて、私は面白いと思った。会話はさらにはずんで、最後はどちらからともなく、よし、二人でイランカラプテの歌を作ろう、という話になった。アイヌ民族と和人の初のコラボレーション。

「約束だぞ！」とデボさん。

「もちろん、約束だぞ！」と私。

酒席での約束である。

まさか実現されるとは、夢にも思わなかったのだが、世の中はわからない。作詞(秋辺デボと新井満の合作)に二年半、作曲(新井満)に半年。完成するまでに三年かかったけれど、**①**と**②**にかくできてしまった。歌詞の一部を次に紹介すると……。

イランカラプテ

　君に逢えてよかった

　遠い町から　はるばると

　よく来てくれたね　旅人よ

　ここは　森と湖の大地

　鳥は歌い　風は大空を吹きわたる

　イランカラプテ　イランカラプテ

　君に逢えてよかった

　今日はいいい日だ

大沼湖畔の森の中を吹きわたる風たちは、「千の風」と「イランカラプテ」という二つの風の歌を、はこんできてくれたことになる。

(新井満「千の風とイランカラプテ」『図書』二〇一七年六月号)による)

問一　——線部 a～j のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直せ。

問二　**A** にふさわしいものを次の中から選び、記号で答えよ。

イ おきざり　　ロ おぎなり　　ハ おぎない　　ニ いざない　　ホ いざよい

問三　**B** にふさわしいものを次の中から選び、記号で答えよ。

イ 直感　　ロ 因果　　ハ 縁　　ニ 絆　　ホ 定め

問四　**C** と **F** のそれぞれにふさわしいものを次の中から選び、記号で答えよ。

イ だが　　ロ たとえ　　ハ では　　ニ だから　　ホ やがて

問五　**G** にふさわしいことばを答えよ。

問六 H にふさわしいことばを、本文中から探して答えよ。

問七 一 にふさわしいものを次の中から選び、記号で答えよ。

- イ 一献かたむける      ロ 一献とりかわす      ハ 一杯かたむける      ニ 一杯とりかわす      ホ 一升かたむける

問八 傍線部①に「とにかくできてしまった」とあるが、あえてこのような言い回しを筆者が用いた理由として適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- イ できあがるのに三年もかかったから。  
ロ できあがるかどうか不安だったから。  
ハ できた歌があまりよくなかったから。  
ニ できるはずがないと思っていたから。  
ホ できることを確信していたから。

二 次の文章を読み、後の問に答えよ。

病気の治療は、方法やスケジュールなどの方針を医師が提案し、患者がそれに同意する―という流れが一般的。それに対し、患者も積極的に自分の希望を伝えて、医療チームの一員として方針を決めることに関わる「患者協働」という新しい考え方がある。現在の「患者中心」の医療とはどう違うのか、協働へと変えるにはどうすればいいのか。十月に東京都内で開かれたイベント「いまこそ、患者協働の医療の実現を！」では、患者と医療者が意見を述べ合った。

「日本の医療を考えると『患者中心』という言葉をよく聞くが、私は少し違和感を覚えている」。イベントの冒頭、主催した「患医ねっと」（東京）代表の鈴木信行さん（四八）は、こう問題提起した。

生まれつき障害のある鈴木さんは現在も難治性のがんを患っている。長年、医療の恩恵を受けてきたが、医師側に自分の意思を伝える難しさも感じてきた。例えば、仕事のスケジュールとの調整を望んでも、医師との間に心の壁があって伝えることはなかなかできない。その理由が「患者中心」の医療にあると気付いたという。

これまで患者は「中心」に置かれていても、いざ治療方針を決める段階になると、「同意」という形はとつても、医師の提案を受け入れることが基本だった。

それに対し、患者自身が「自分はどう生きたいか」を軸に、医師らと共に疾患に向き合う姿勢が大切だと気付いた。そのためには「患者ももつとやれることがあるし、医療者にももつと、やるべきことがあるだろう」と問い掛けた。

ともに主催した株式会社「ペイシエントフッド」（同）代表の宿野部武志さん（四九）は三歳で慢性腎炎になり、十八歳から人工透析を続ける。一回五時間の人工透析は週三回。患者の中には、「医師との関係がこじれると通院しにくい」と、薬の変更といった希望を伝えられない人も多いという。だが「治療や薬の選択は命の選択。一番大切な命を他人に任せることになる」と疑問視していた。

宿野部さんは患者の思いを社会や医療に生かそうと、医療機関でのコンサルティングなどを行う会社を起業した。腎臓病患者らのためのウェブサイト「じんラボ」も運営。これからは「患者も（健康に関する情報を得て、意思決定に生かすための）ヘルスリテラシーを上げることが重要」と指摘した。

患者協働の動きはまだ緒についたばかり。患者側も「まずは患者が医師にきちんと意志を伝えることが大切」とする。ただ医師が医療者側からも「協働」を支持する声が出ている。

慶応大看護医療学部教授の加藤真三さん（六一）は、公開講座「患者学」を開き、市民と医療者の対話を進めている。「急性疾患の治療は医師が決めても、慢性疾患の場合は『同意』ではなく『合意』が大切。医師と患者が対等な関係で考えること」と話した。

腎臓内科医でコンサルティング会社「オフィス・ミヤジン」（千葉県浦安市）取締役の宮本研さん（四二）は、医師の知識と経験知の多さに言及。患者協働を進めるべきだとした上で、「医師には積み上げてきたものが多くある。患者さんはぜひ『どう考えますか』と医師に聞いてほしい」と呼び掛けた。

（竹上順子 『患者協働』の医療実現を」（東京新聞・二〇一七年十一月十四日）による）

問 次の a～j それぞれについて、この文章の内容と一致しているものには○、一致していないものには×をつけよ。

- a 鈴木信行さんが違和感を覚えるのは、「患者中心」の医療という表現が聞きなれないものだからである。  
b 鈴木信行さんが違和感を覚えるのは、「患者中心」の医療という表現と実態とにずれがあるからである。  
c これまでの「患者中心」の医療というものは、医師の提案に患者が十分に理解し納得して成立していた。  
d これまでの「患者中心」の医療というものは、医師の提案に患者が従うという前提で成り立っていた。  
e 宿野部さんは、「患者中心」の医療では、患者と医者との関係がこじれることがあると考えている。  
f 宿野部さんは、患者協働の医療では、患者と医者との関係がこじれることがあると考えている。  
g 宿野部さんは、患者協働の医療の前提は、患者がまず健康に関する情報を得ることだと主張している。  
h 宿野部さんは、患者協働の医療の前提は、医師がまず健康に関する情報を得ることだと主張している。  
i 急性疾患の医療においては、医師と患者が対等な関係であることが求められている。  
j 慢性疾患の医療においてのみ、積極的に医者に質問する権利が患者にはある。